森の詩 Cantum Silvae
貴婦人の十字架
CHAPTER 3

Author : Yu Yaotome
Copyright@ 2015 Yu Yaotome

目次

逃走
姫君到着
疑い
賢者の嘆き
遠乗り
逮捕
国王と貴婦人
失われた伯爵

逃走

前夜の可憐なラウラを思い浮かべながら、彼が城へと向かうと、様相が違っていた。マックスは一人の男がザッカとともに孔雀の間に入っていくのを見た。どこかで見たことのある男だった。ここにいるはずのない誰か。訝りながら西の棟へと愛する女を訪ねて行くと、信じられない光景を目にすることになった。開け放たれた紺青の間にいつもの通り馬鹿げた笑い声を響かせるマリア＝フェリシア姫と女官たち。迎え出たエレインが呆然とする彼をダンス室へと誘導し、ラウラが身代わりとして輿入れしたことを告げたのだった。

エレインはラウラとともにグランドロンに行ったアニーの親友で、彼女の他にラウラのマックスへの想いを知っていた数少ない味方だった。そしておそらく前夜のことも知っていたのだろう。

「何故、こんなばかげたことを。いつまで隠し通せると思っているのだ」

「長い必要はないのです。婚姻の日まで隠し通せれば。ああ、かわいそうなラウラ様、哀れなアニー……」

彼は歯がみした。はじめからわかっていてもよかったのだ。《氷の宰相》イグナーツ・ザッカは、突然現われたレオポルド二世にラウラを世襲王女と偽って会わせた。はじめから身代わりを送り込むつもりだったからだ。あの時は断るから問題ないと言っていたのに、結局は婚儀が決まった。だが、ラウラがヴェールをしていたから、わからないであろうと言われた戯言を信じていた自分の愚かさに腹が立って仕方なかった。

ラウラが泣きながら暇乞いに来た意味も深く考えなかった。マックスは帰ろうとする彼女の額に口づけをしながら言ったのだ。

「明日、婚礼行列が去ったら、城に君を訪ねる。一緒にこの国を出よう」

突然思い出した。そうだあの男は、センヴリの王宮にいた男だ。宰相ベリオーニの側にいつもいた。今ルーヴランとセンヴリとがひそかに通じる理由は一つしかない。軍事同盟だ。偽王女との婚礼の隙を狙ってグランドロンに奇襲を仕掛けるつもりなのだ。ラウラとアニーを犠牲にして。

「ティオフィロス先生。国を出たはずのあなたがここでいったい何をなさっているんですかな」

その声に二人が振り返ると、そこには衛兵たちを従えた《氷の宰相》が立っていた。

マックスは西の塔へと連行された。そこは、彼は知らなかったが昨日までラウラが幽閉されていた場所だった。窓がかなり上の方に一つしかないのを見て取った彼は閉じこめられてなるものかと抵抗したが、衛兵たちは槍の柄で殴り掛かり、倒れた彼を蹴った。これまでこの城で彼が受けていた敬意の欠片も示さなかった。そして、重い音を立てて扉が閉められた。

衛兵たちは二人ずつ三交代で、寝ずの番をしていた。懐柔する余地も全くなさそうだった。余計な事をするよりはチャンスを待った方がいい、マックスははやる心を抑えながら出される食事をきちんと食べて体力の温存を図った。以前のように王侯貴族の相伴で食べていた食事ではなく、召使いたちが食べているような簡素な食事だったが、農民たちがようやく命をつないでいた薄い粥や、古くなりかけた肉とは違って、十分に食べられるものだった。この程度の扱いで堪えると思うなよ。マック

スは心の中でつぶやいた。なんとか逃げる手だてがないか、彼が考えている間に二昼夜が過ぎた。

変化が起きたのはその翌日の午後だった。交代する衛兵と食事を運ぶ侍女しか来なかった塔に、大きな物音がして何人かの人間がやってきた。多くの衛兵の数からすると、宰相でも来たのかと予想した。扉が開けられるとそこには果たしてザッカが立っていた。しかし、それだけではなく、バギュ・グリ侯爵の姿もあった。二人は衛兵たちをドアの近くに立たせて、盃を持った召使いジャックと一緒に彼の近くに寄ってきた。

「侯爵様！　宰相殿！」

ザッカは髭をしごきながら上目遣いで言った。

「非常に残念ですな。何も知らないまま、ヴォワーズへと旅立っていてくだされば、あなた様に害を加えるつもりはなかったのです。優れた人材というものは、国を越えてのこの世の宝です。みすみすその命を絶つのは私にとっても苦しい決断なのですよ」

「侯爵様！　この男のいうなりになって、奸計を押し進められたのか。たとえ血は繋がっていなくとも、ラウラはあなたの娘ではないですか。この王宮に仕え、その働きぶりであなたの家名をも高めた功労者である彼女に対しての父親としての報いがこれなのですか」

マックスは食って掛かった。

「何を言っているのかわからないね。わが娘ラウラはグランドロンへと嫁がれた王太女殿下の《学友》としての大役を終え、わが領地に戻り幸福に暮らしているのだ。いいかね。私も宰相殿も国王陛下も何の策略もしてはいない。城の記録にはバギュ・グリ侯令嬢はつつがなくこの城を出た事だけが記されるのだ」

そこで《氷の宰相》が言葉を継いだ。

「そして、教師であったマックス・ティオフィロス殿もだよ」

彼は懐から小さな紙包みを取り出して、そっと広げた。白っぽい粉が現れた。召使いジャックが捧げ持った銀の盃を手にとり、それを入れてゆっくりと揺らしながら溶かして、ゆっくりと進み出た。

「さあ、これを飲んでいただきましょうか」

「それは……」

マックスは眉をひそめて、狼狽えた様子を見せた。ザッカは銀の盃を持つと、じっとその目を見つめて言った。

「叡智を尊び、わざわざギリシャ風に名乗られているあなたにふさわしい最後を。ギリシャではこの毒による死は永遠の不死に至る扉を開くと信じられていたそうではないですか」

その時、バギュ・グリ侯が《氷の宰相》を押しとどめた。

「神に身を捧げたあなたにそれはさせられない」

そういって盃を手に取ると自分が進み出てマックスの前に差し出した。彼はジャックが青ざめて震えているのを見た。

「さあ、観念して、これを飲むのだ。これは我々の情けだよ。死ぬまで飢えさせられたり、馬車に引き裂かれるような最後は迎えたくないであろう？」

あざ笑う侯爵を睨みつけると、彼はその盃を受け取った。液体はぬるま湯のようで、盃は暖かかった。

「私はラウラと夫婦になる誓いを立てました。あなたは娘殺しだけでなく、婿殺しの罪をも背負って神の前に出る事になりますよ」

侯爵は感銘を受けた様子もなく鼻で笑った。マックスはさらに青ざめるジャックを見た。それから侯爵とザッカを睨みつけると、その毒杯

を一氣に呷った。ザッカが言った通り、ソクラテスを死に追いやった毒ニンジンだった。勝ったと思った。この量なら全く問題ない。十二歳の時に飲まされたものはもっと強かった。あの時の苦しみを思い出しながら、彼は苦悶に身を歪める振りをした。十分くらい待ってからゆっくりと手足の力が抜けるようにその場にうずくまった。それから時間をかけながら顔がひきつり、息ができない振りをした。ザッカと侯爵を睨みながら、その場で息絶えたように力を抜いた。

《氷の宰相》は小さく十字を切った。侯爵は目の前で起こした殺人の罪にさすがに震えていたが、ザッカとジャックの手前ことさらしゃんと立ち、大きく息をつくと衛兵を従え踵を返して塔から出て行った。ザッカはジャックに刑死体置き場へと遺体を運ぶように言いつけて出て行った。

ジャックは震えながらマックスの体に触れた。それから死体を引きずるような事はせずに、患った大切な人間を扱うように背負って、ゆっくりと階段を降りていった。ふらつきながら堪えきれずにすすり泣いているのがわかったので、彼はほんのわずかに指を動かしてジャックの上着をつついた。ジャックはびくっとして、自分の肩にもたれかかっている死体であるはずの男の顔を怖々と見た。小さくウィンクするとそのまま死んだフリを続けた。召使いは仰天したが声を上げたりはしなかった。再び死体のフリをしている男を背負い直すと、先ほどよりもしっかりとした足取りで階段を降りていった。

城の最下層にある刑死した罪人たちの死体置き場まで来るとジャックはマックスをそっと床に降ろして急いで扉を閉めると「だんな様！」と言った。

マックスはそっと起き上がるとジャックに耳打ちした。

「目立たぬ服装と行き倒れの死体を用意してくれぬか」

「はい。しかし、お体は大丈夫なのですか？　毒は……」

「なんともない。心配するな」

ジャックは頷くと外へ出て行った。マックスはその暗い小さなあかりとりの窓しかない空間に残された。幸い現在はここに刑死体はないようだが、何ともいえないすえた臭いがしていた。少なくともこの場所には高貴なる方々は来ない。ジャックがうまくやってくれれば無事に逃げられるはずだ。わずかな時間も惜しくて、彼は自分の登城用の衣装を脱いで下着姿になった。

二刻ほどしてジャックとマウロがやってきた。二人は一人の男の死体を運んできた。用意された町民の服をマックスが着て靴の紐を締めいてる間に、二人は死人に彼の衣装を着せて、ジャックが石で死体の顔を叩き判別が出来ないようにした。

「運んだ時に落としてこうなったと言っておきます。まず、誰も確認に来ないとは思いますが」

それからマウロは後の事をジャックにまかせ、マックスを連れて使用人通路から城の外へ出た。林の近くの小さな小屋の外に一頭の馬がつながれていた。小屋から小さな背負い袋を持ってくると、マウロは中に入っているいくらかの食料と金を見せた。

「急いで用意できたのはこれだけでした。申しわけありません」

「十分だ。本当にありがとう。ラウラだけでなく、君の妹アニーも救えるよう、全力を尽くすよ」
「ありがとうございます。幸運をお祈りします」

彼はもどかしげにまたがると、馬をグランドロンに向けた。戻るつもりのなかった祖国。義理すらも果たせていなかった恩師のもとに戻る恥ずかしさすらも感じなかった。どうしても王宮に行かなくてはならない。自分一人ではどうやってもラウラを救えない。

彼の人生は常に自由への憧れで占められていた。ディミトリオスの厳しい指導に耐えたのも自由になるためだった。ようやく手に入れた誰にも束縛されない生活。国から国へ、街から街へと氣ままに遷り、自分の力だけで生きる。それが出来るようになってまだたったの二年だった。だが、今の彼にはその生活を失うこともなんでもなかった。

ラウラ。だめだ。死なせたりなんかしない。待っていろ。

姫君到着

グランドロンはルーヴランよりも夏の来るのが遅かった。一昨日、城を出る前に見た大きな栃の大木には大きな白い燭台のような花が咲き誇っていたが、ここでは蕾が固かった。しかし、夏は婚姻行列とともに到着したらしく、若緑の大きな葉の間から、突き刺すほどの強い光が射し込んでいた。

ラウラはそっと衿の下に隠された十字架に手を当てた。他の全てはマリア＝フェリシア姫の衣装だったが、これだけは彼女自身のものだった。愛を交わした後、帰ろうとするラウラを呼び止めマックスが微笑みながらそっとその首に掛けてくれたのだ。

馬車が停まり、扉が恭しく開けられると、そこに立っていたのはルーヴランの従者たちではなかった。わずかに離れた所にアニーが立っている。それだけが唯一の心の支えだった。従者の助けで馬車を降りると、しっかりと面を上げてグランドロン城の正面階段を見上げた。顔を隠すヴェールの向こうに、壮麗な城が見えた。なんと美しい城だろう。淡いクリーム色の壁、白い大理石の彫刻、たくさんある窓はルーヴランのものよりも大きかった。

正面階段は三十段ほどあるだろうか、その上に、ラウラは懐かしい人影を見た。赤いどっしりとした上着を着た、黒髪の青年王。その横には、あの時もぴったりと横にいたヘルマン大尉が控えている。この懐かしさと安堵感はどういうことなのだろう。彼女は訝った。七日もしないうちに、私はこの人に憎まれて処刑されるというのに。

ラウラの心に、あの月の光の下での近しい会話が蘇る。頬に触れた

暖かい手のひら。

「よくお越し下された。さぞ長旅で疲れたことであろう」
よく通る声で王は言う。その顔には隠しきれない喜びがあふれている。
ラウラは目を伏せた。
「いいえ。徒歩で来たものの疲れを思えば、私など……」
それを耳にしたアニーは、心の中で思った。姫君だったら、さぞ疲れたと大騒ぎしたでしょうね。

姫君を連れてきたルーヴランの馬車行列がそれぞれ王とその花嫁に敬礼をしてからその場を離れていった。ラウラは脇に退いて佇んでいるアニーをちらりと見た。この小さな娘と自分を守っていたルーヴランの鎧は、全て消え去っていく。ザッカの約束など信じていなかった。彼らは二人を犠牲にするつもりだ。どんなことがあっても、この忠実な娘だけは婚礼の前に安全な場所に逃がさなくては。そのためには、婚礼の日までなんとか持ちこたえねばならない。
「震えているのか」
レオポルドが訊いた。ラウラは頷いた。
「はい。これまでずっと側にいたものたちが、急に去るとやはり心細く感じます」
国王は笑った。
「率直でよい。心配するな。一週間後、我々の婚儀には、再びそなたの父である国王陛下の使者と貴族たちがこの宮廷にやってくる。そして、そのうちにそなたにとって近しく側にいるものとは、余とこの宮廷のグランドロン人となるだろう」

最後の馬車が王宮前広場から去ると、レオポルドはそっとラウラの手を取った。
「さあ、ようこそ、そなたの新しい我が家へ」
二人が王宮へと入っていくと、ヘルマン大尉をはじめ並んでいた廷臣たちも二人に続いた。
大広間に足を踏み入れ、ラウラは思わず息を飲んだ。広く天井がとても高かった。ルーヴの王宮のような金細工や細かな装飾はあまりなかった。まっすぐに天へ伸びる大きな大理石の柱は上部で鋭利な曲線を描き天窓に集合するようになっていた。計算し尽くされた光の魔術で、広間には荘厳な空氣が漂った。それは厳しくもあり、さらに輝かしくもあった。ルーヴの城が文化と芸術の勝利であるのならば、このヴェルドンの王城は力強さと正義の讃歌と言い表すことができた。強い軍隊。質実剛健。厳格でもあり実利的でもあった。
ラウラはとんでもないところに来てしまったと感じた。この城を最上と考える人びとを簡単に騙すことなどできるのだろうか。美しいもの、そして楽しいものを追い求め、美食と狩りと贅沢な品々に囲まれたあの将校たちの率いる軍隊が、規律と厳格さに統率され、一分の隙も見せずにこの場に立ち並ぶ男たちに戦いを挑んで勝つことは可能なのだろうか。
広間には楽人たちがいた。レオポルドが頷くと、控えていた侍従長が合図をし、楽人たちが『森の詩』を奏でだした。王は笑ってラウラの手を取り広間の中央へ向かった。

「また少し上手くなったな」
「何がでございますか」
「言葉と、それからこの踊りだ」
　ラウラは何と答えていいのかわからなかった。あれから一ヶ月、彼女は歓びに満ちてグランドロン語を習った。マックスの生まれ育った国の言葉、彼の話してくれるヴェルドンの様相、老師ディミトリオスの難解な哲学と知識に恵まれた彼の少年時代、旅で経験した時に面白おかしく時に物悲しい逸話。マックスの優しい語りに酔いながら、ラウラはグランドロン語の夢まで見た。そして、この『森の詩』のダンスも婚礼で姫が恥をかかぬようにと十日ほど前に再び練習したのだ。マックスの手に触れて、すぐ近くで踊る幸せをかみしめたのは昨日のことのようだった。ラウラが涙を浮かべたのはヴェールに遮られてもちろんレオポルドには悟られなかった。
　彼は上機嫌でラウラに話しかけた。
「そなたが結婚を承諾してくれたと聞いて、余は子供のように喜んだのだ。わかっているのか」
　ラウラは不思議に思って見上げた。
「グランドロンの国王陛下に申し込まれた結婚を断る国はございませんでしょう？」
　彼は当然だといいたげに頷いた。
「それはその通りだ。そもそも、そなたや余のような身分では、結婚相手に求められるのは家柄や政治にどのように役に立つかだけだ。実のところ外見や氣だての良さ、それに相性も考慮されることはない。だが、そういうものだとわかっていても、余は亡き父と王太后である母のような夫婦のあり方ではなく、ずっとあるべき結婚の鑑としてある夫婦の姿を思い描いていた」
「それは……？」
「今は亡き父の王妹マリー＝ルイーゼとその夫のフロリアン・フォン・フルーヴルーウー伯爵だ。お互いに深い愛と信頼で結ばれ、尊敬し高めあっていた。残念ながらその幸福は数年しか続かず、伯爵は何者かに殺害され、叔母も失意のうちにこの世を去ったが」
「フルーヴルーウー伯爵……」
ラウラはその名を聞いて戦慄した。《氷の宰相》ザッカの指揮でルーヴランが、グランドロンから何を置いてでも奪おうとしているのは、金山と鉄鉱石、そして南へ向かう峠のあるフルーヴルーウー伯爵領だった。
「あの宵に決めたのだ」
　ラウラは国王の言葉にはっとした。
「そなたと言葉を交わしたあの月の宵に。善き国王と女王であるだけでなく、お互いに信頼し尊敬しあえる伴侶になれると確信が持てたのだ。今まで多くの姫君と直接逢ったが、そなたのような相手は一人もいなかった。それがルーヴランの世襲王女なのだから、これ以上の幸運は望めないと思った」
「陛下……」
　広間に集う貴族たちが次々と踊りの輪に加わった。厳格に見えた広間も、華やかな衣装で踊る人びとで明るくなった。グランドロンは、ルーヴランとセンヴリの連合軍が攻めて来ることも知らず祝祭ムードに酔っていた。

疑い

「陛〜下っ」
甘ったるい声がした。ハイデルベル夫人は反射的にきつい顔になって、声のした方を振り向いた。レオポルドは多少困ったように口端をゆがめた。
「ヴェロニカか。なんだ」
『なんだ』は、ないでしょう？　花嫁様にご紹介いただけませんの？」香水の匂いをまき散らしてデコルテが大きく開き、豊かな胸を強調したえび茶色のドレスをまとった女はその肉感的な厚い唇をゆっくりと閉じてみせた。ハイデルベル夫人は我慢できずに前に進み出た。
「恥を知りなさい。あなたみたいな女が未来の王妃の友情を勝ち得る可能性があるなんて思わないことね。つまみ出される前に消えなさい」
女はまったく動じた様子もなかった。マダム・ベフロアの名で知られるヴェロニカは城下にルーヴラン風のインテリアの高給娼館《青き鱗粉》を経営している。彼女の一番の顧客は国王その人であり、定期的に何人もの女たちを派遣していた。だが、レオポルドは一人の娼婦を連続して呼ぶ事がなかったので、愛人のように振る舞える女はいなかった。その代わりに、派遣元のヴェロニカがかなり頻繁に出没しては愛人のごとく自由に振る舞っていたので、ハイデルベル夫人は腹に据えかねていた。そもそも、何がマダム・ベフロアだ。ここはグランドロンなのにルーヴランのような名前を名乗っているのが氣にくわない。その方が華やかで文化的だとでも言いたいのだろうか。
「あなたの意見なんかきいていませんわ、ハイデルベル夫人。陛下、まさか、結婚するからって、私たちの楽しい遊びをおやめになるわけじゃないでしょう？」
「ううむ。どうかな」
レオポルドの歯切れは悪い。二人の女は思わず顔を見合わせた。結婚するぐらいで、国王が女遊びをやめる可能性など欠片も考えていなかったからだ。王が即座に否定しなかった事にひどく驚いた。

ベアーテ・ハイデルベル男爵夫人は、サンドロン侯爵の四女で王太后の従姉妹にあたる。女官として早いうちから後宮に務めたが、まじめで浮ついた所がないために早くから侍従長と王妃の両方に信頼され、前国王フェルディナンド三世が若いという反対意見にも拘らず宮廷奥総取締に取り立ててから二十年近く経っていた。現在の王太后である王妃だけでなく、社交の中心でもあったフェルディナンド三世の妹、フルーウールーウー伯爵夫人マリー＝ルイーゼからも信頼が厚く、それゆえ今は亡き伯爵夫人を敬愛する現国王レオポルド二世もハイデルベル夫人を父王と同じように尊重していた。
ハイデルベル夫人は、レオポルドが馬鹿げた女遊びをする事に大賛成だったわけではないが、自分が意見をしてやめさせるべき事だとは思っていなかった。国王は節度を持って遊びと政治を分けていたし、また、結婚相手をふさわしい姫君と決めていたのをわかっていたからだ。
レオポルドは、多くの花嫁候補対して非常に手厳しかった。センヴリ王国のイザベラ王女や、マレーシャル公国のクロディーヌ姫は、家柄も評判も悪くなかったにも拘らずさっさと断ってしまった。マリア

＝フェリシア姫はルーヴランの世襲王女で家柄と結婚で得られる領国が別格であり、さらに絶世の美女との評判も耳にしていたが、ハイデルベル夫人はこの話がまとまるとは夢にも思っていなかった。マリア＝フェリシア姫の美しさ以外の資質についての噂は、あまりにも芳しくなかったし、レオポルドの普段の言動からしてそのような姫を生涯の伴侶に選ぶとは考えにくかったからだ。

ところがレオポルドはルーヴランから戻ってきてすぐにマリア＝フェリシア姫に正式の結婚申し込みをした。濃いヴェールに阻まれて、未だに姫の顔を見たことのないハイデルベル夫人は、噂のわがままで浅薄な王女がどうやってレオポルドの心を射止めたのかどうしても納得がいかなく、到着した花嫁に非常に強い警戒心を持っていた。

しかも、この王女は新しく彼女に仕える事となったグランドロンの侍女たちを信用していなかった。親しく打ち解ける事がないばかりか、着替えや身支度の時にルーヴランから連れてきた侍女以外のものが同室する事を禁じたのだ。ハイデルベル夫人は侍女たちからの報告を受けて、すぐに表にいってレオポルドに報告した。

「おかしいと思いませんか？　着替えの間、あの二人以外は同室できないんですよ。何か危険なものでも隠し持っていないいとも言い切れませんよ。十分にご注意なされませ」

王は笑って頷くだけだった。いったいどういうことなのだろう。他のことはともかくこの花嫁のことになると、どうも陛下の判断力は著しく低下している。ハイデルベル夫人も側に控えているフリッツ・ヘルマン大尉も思った。

「たとえ刃物を持っていようとも、あの細腕では余にかすり傷一つ追わせることは出来ない。それに……」

王はそれ以上は口にしなかった。

（あれと余の心は通いあっているのだ。国同士の仲がどうであろうとも……）

ヴェロニカは王の居室からでていつものごとくプラプラしていた。怒りとも不安ともわからぬ感情に支配されていた。一つだけわかるのは、やってきた王女のことを過小評価し過ぎていたということだった。美貌だけれども浅薄でわがままな女だったのではないのか。

王の愛人やそれに準ずる地位に就きたいと思ったことはない。王族貴族やそれに準ずる貴婦人と張り合うつもりも全くなかった。彼女は自分の力で築き上げてきた娼館《青き鱗粉》を誇りに思っていた。他の全てには決して超えられない階級の壁があるが、彼女の王国では誰もが同じだった。同じ欲望、同じ衝動、同じ鼓動。それを支配するのは、天におわす神と、人を惑わす悪魔の両方だった。人には決して逆らえない。その支配は何よりも誰よりも強いはずだった。

ヴェロニカとにとって、レオポルドは最上の顧客であると同時に、一種の友情もしくは戦友に近い感情を共有する仲だった。ヴェロニカは、その口の堅さを王に示し信頼を勝ち得ていた。また、彼女は彼の必要とする情報を独特の方法で手に入れて、若い王の親政を補佐した。賢者ディミトリオスやヘルマン大尉が表の正式な面から補佐したのと同じように、彼女はレオポルドを裏の隠れた面から支えてきたという誇りがあった。賢者やフリッツ・ヘルマンと全く別の次元で、彼女はレオポルドの最大の理解者であると同時に、どの女にも負けない

特別な地位を彼の心の中に占めていると感じていた。
だが、ルーヴランからやってきたあの女は、突然、王の心の中に居座った。顔も見た事がなく、誰も逆らえない本能の焔でねじ伏せたわけでもなく、わずかな会話をしただけで。いったいどうやって。

彼女はふと足を止めた。見慣れぬ娘が向こうからやってきたのだ。服装からすると侍女のようだが、服装がグランドロンのものと少し違う。袖の膨らみや腰の絞り方などがわずかに華やかに見えるのだ。ということは、あれがハイデルベル夫人の言っていた王女づきの侍女なのね。

その娘はまだ半分子供のようだったが、妙な緊張が感じられた。何かを隠しているような印象だ。ヴェロニカとすれ違う時に下を向いて頭を下げた。腕の所に非常な力が入っている。手に持っているのは洗濯物のようだが見られないように抱えている。それは奇妙な行動だった。洗濯ものは専門の侍女が部屋に取りに行くはずだ。では何を洗おうとしているのだろうか。しかも、グランドロンの人間に知られないように。

ヴェロニカは少し考えてから、女官たちの控えている部屋に向かった。普段ならできるだけ近寄りたくない、面倒な場所だが、今回は利害が一致するように思った。ハイデルベル夫人を呼んでもらおうとしたが、残念ながらもう退出したと言われた。ヴェロニカはハイデルベル夫人づきの侍女の中で一番口の堅そうなアナマリア・ペレイラを連れ出した。

賢者の嘆き

「お前は、氣が違ったのか」
ようやく帰ってきたと思えば、なんということを。ディミトリオスはマックスの話が上手く飲み込めなかった。青年は、帰ってくるなり懇願したのだ。
「どうかラウラの命を救って下さい」
老賢者には何のことか全くわからなかった。それから、マックスがルーヴランの策略、つまり婚礼の日にセンヴリとともに攻めてくることを口にすると、信じられなくて首を振った。
「世襲王女を犠牲にしてか？」
「王女ではないのです。ザッカのやつ、はじめからラウラを犠牲にするつもりだったのだ。ラウラは全て承知でここに殺されに来たのです」
「ラウラとは何者だ」
老師が訊くと、マックスはディミトリオスをまっすぐに見つめた。
「王女の《学友》です。そして、僕と将来を約束した女です」
老賢者はふらつきながら椅子に座ると、額に手を当てた。この青年の話を総合すれば、二日前に大歓迎のもと到着した姫君は偽物だということになる。ルーヴランが攻めてくるのが本当なら、今すぐ情報を届けなければならない。婚礼まで七日間しかないのだ。
だが、そうなればその女は即座に処刑されるだろう。いま目の前にいる若者はそれをわかっていて、よりにもよってこの自分に、愛する女を救えと言っている。無茶苦茶だ。
マックスは、ディミトリオスの前に膝まづいた。

「老師、聴いてください。僕は旅で多くの人生を見てきました。わずかでも関わった人間もいれば傍観していただけのこともありました。彼らの人生は、僕の人生とはわずかに交わるだけだった。僕はそれでいいと思っていた。僕にとって意味のある、命を捧げても惜しくない貴婦人はずっと《黄金の貴婦人》ただ一人だったから。だが、今は違う。ラウラを見殺しにして生き延びても、その瞬間から僕の人生は意味のない、穢れたものになってしまう。僕は、僕の貴婦人を救わなくてはならないんです！」

髭をしごきながら、書斎を落ち着きなく歩きまわるディミトリオスに彼は畳み掛けた。

「どんな方法でもいい、彼女を王宮から連れ出せさえすれば、それでいいのです」

「その女をどうするつもりだ」

「どこか遠くに連れて行きます。誰にも知られない、グランドロン人など一人もいない、この世の果てで二人で暮らします」

「馬鹿なことを言うな！　約束を忘れたのか。そなたがフラフラしていていいのは三年だけだ。そなたはグランドロンで生きねばならぬというのに」

「先生。鍛冶屋の息子が一人減ろうと、グランドロンは何も変わらぬではありませぬか！　僕の役目はもう終わったはずだ」

ディミトリオスは厳しい顔をして言った。

「何だと。それはどういう意味だ」

マックスはずっと言えなかった言葉を口にした。

「王は無事に毒耐性を身につけられた。あなたが子供への教え方について試行錯誤をする必要もなくなった。あなたと、あの方《黄金の貴婦人》が望んでいた通りの強くて聡明な王者になられた。実験台の子供はもう必要ないでしょう！」

ディミトリオスは彼に座るように目で指図して、ドアを閉めた。

「《黄金の貴婦人》が誰だかわかっているのか」

マックスは座らなかった。

「いいえ、はっきりとは。でも予想はついています。フルーヴルーウー伯爵夫人、マリー＝ルイーゼ王妹殿下でしょう。亡くなられたのとあなたのもとにいらっしゃらなくなった時期が一致していますし、いただいた十字架の後ろについていた双頭の馬の紋章は伯爵家のものですから。夫と子供を同時に亡くされ、全ての希望を甥であるレオポルド様に託されたのだと、旅の途上で思い当たりました」

「そこまでわかっていて、お前は自分がレオポルド王子のための実験台だと信じていたのか」

「違うとおっしゃるのですか」

「もちろん違う。他のものたちが、お前の事を毒の試し役だと噂していたのは知っている。そう思われる方が都合が良かったので訂正しなかった。絶対に知られてはならなかったが、毒耐性を何を置いてもつけなくてはならなかったのは王子ではなくてお前だったのだ」

「？」

「考えろ。毒で命を落としたのは誰だ。そして、同じ危険に晒されていたのは」

マックスが知る限りで毒で命を落とした貴人は一人だった。マリー

＝ルイーゼ王妹殿下の夫、フルーヴルーウー伯フロリアン二世。そして、二人の間に生まれた子供は、二歳にして父の後をついで伯爵になったが、常に毒殺の危険に晒されていた。失踪するまで。それから二十数年間姿を現さないので、誰もが死んだものだと思っていた。マックスも。

「ま、まさか」

「そう。お前こそが、マクシミリアン三世、王妹殿下の子ゆえ王位継承権一位の失われたフルーヴルーウー伯なのだ。王妹殿下は私に逢いにいらしていたわけではない。知られれば再び毒殺の危険に晒されるため、抱く事も許されぬ我が子をひと目でもみたくて、私の反対を押し切って何度も足を運ばれていたのだ」

マックスは大きく目を瞠り、黙ってディミトリオスを見つめた。《黄金の貴婦人》が、何のために老師を訪ねてきたのか、飲み物を運んでくる少年にいつも優しく話しかけたのは何故か、贈り物が何を意味するか、彼は自分の素性と繋げて考えた事がなかった。身分の違う手の届かない貴婦人だと信じていたから。自分は王太子のための毒実験に使われる庶民の一人だと頑に信じていたから。

「そんな荒唐無稽な話を誰が信じると……」

「だからこそ、王妹殿下は遺言を残されたのだ。フルーヴルーウー伯爵家家宝の、あの黄金の十字架を持つものこそ、フルーヴルーウー伯マクシミリアン三世だとな。そなた、《黄金の貴婦人》にいただいた十字架は持っているのだろうな」

彼は戦慄した。突然、ありとあらゆる事が頭の中で一致した。

彼女がくれた十字架、絶対に手放してはならないと繰り返し行った言葉、いつかお前は国王に仕えるのだと繰り返し言った賢者。双頭の馬。伝説の《ヴィラーゴ》ジュリアと伯爵位を授かった馬丁ハンス＝レギナルドを象徴する、フルーヴルーウーの紋章。その紋章のついた十字架は単なる装飾品ではなくて、家宝であったに違いない。それをただの平民の子供に渡したのは貴婦人の優しさの範囲を大きく超えていることを考えたことがなかった。

マックスは打ちのめされて両手で顔を覆った。絶対に手放してはならぬと言われていたその十字架を彼は手放してしまった。あの夜、誰よりも愛しい女に永遠の愛の証として。彼の真心を示すために。翌日には再び一緒になるのだと信じていた。常に一緒にいるのだから、彼女が持っていても構わないだろうと思ったのだ。

遠乗り

「おや。デュランの旦那。それが嫁さんですかい？」
　貧しい身形をした男がいともたやすくレオポルドに話しかけたのでラウラは驚いた。
国王はそれに対して機嫌良く答えていた。
「そうだ。なんとかいう面倒くさい伝統で、まだ素顔を見せてはいけないそうで、結婚するこの余ですら顔をみた事がないんだが」
「なんとまあ。国王ともなると、そんな妙な伝統にも従わなくっちゃならんというわけですね。わしは国王じゃなかったおかげで、好みの女をかかあに出来ましたぜ」
　レオポルドは簡単に肩をすくめた。
「顔はどうでもいいのだ。だが、王女ならどんな女でもよかったわけではない。だからもう一つの伝統は無視して、会いに行って決めたのさ。マリア＝フェリシア、これは余の古くからの知り合いでトマスという靴屋だ」
「よろしく」
ラウラは戸惑いながらトマスに軽く会釈をした。
「本物の姫さんと口を利くなんてはじめてですよ。ようこそ、グランドロンへ。お幸せをお祈りいたします」
　トマスと話している間に、家々の間から、やはり粗末な身なりの男や女たちがつぎつぎと出てきた。
「デュランの旦那だ」
「ああ、あれがルーヴランの姫さんだとさ」
口々に話す声が聞こえる。ルーヴランではあり得ない光景だった。
「陛下、この方々は……」
ラウラは小さな声で訊いたが、トマスには聞こえたらしくゲラゲラ笑いながら勝手に答えた。
「姫さん、この方はね、まだ王子だった頃に、身分を隠してよくこの辺りにお忍びでいらしていたんですよ。わし等は、どこかいい所の坊ちゃんだとは思っていたんですが、まさか王太子殿下とは夢にも思わんでね、名乗られるまま『デュランの若さん』なんて呼んで、靴の修理を教えたりしてね」
「それで、カレウス村での疫病はどうなったのだ。ねずみの駆除はきちんと行われたのか？」
レオポルドはトマスに訊いた。
「はい。例のお役人さんはやる氣がまったくなくて、駆除を請け負うシュルツのヤツとくだらない金額交渉に時間をかけているとお話ししましたよね。旦那が話を聴いてくださったおかげで、郡司のマーシャル様が自ら指揮を執るようになったんですよ。おかげで三日目には村はきれいになりましてね。寝込んでいる奴らも半分になっているそうです」
「医者は」
「もちろん、ボウマー先生やロシュ先生が足を運んでくださってます。粉屋のパウルが感激していましたよ。あいつお医者さんが村に来るなんて信じられなかったようで」
　レオポルドは満足そうに頷いた。ラウラは宮廷で使うのとは違うト

マスの言葉づかいに必死で耳を傾けていた。二人の会話の意味はようやく聴き取れていたが、本当に自分が耳にしている言葉が正しいのか自信がなかった。そんなことがあるだろうか。この貧しい人たちの所に医者が派遣されているというのは。

レオポルドと村人たちはなおも親しく会話をしていたが、トマスがふとレオポルドの後方に目を留めた。

「あれ、丘の方からけっこうな馬たちが来ますね。大方、ヘルマンの旦那たちでしょうね」

そう遠くに舞い上がる土ぼこりを見て笑った。国王はうんざりした顔をして頭を振った。

「なんだ。もうみつかったのか。トマス、悪いがあいつ等を少し足止めしてくれ。少しは未来の花嫁と自由な時間が欲しいんでな」

そう言うと、レオポルドは再びラウラを軽々と馬に乗せて自分も飛び乗ると《シルヴァ》の中へと逃げ去った。トマスは笑って頷いた。

＊　＊　＊

一刻ほど前、後宮のラウラが居る部屋にレオポルドは突然やってきた。

「マリア＝フェリシア、そなたに見せたいものがある。ついてまいれ」

ラウラは驚いて「今でございますか」と訊いた。

「そうだ。うるさいフリッツを巻いてきた所だ」

そう言ってから彼は彼女の方をちらりと見た。

「こんな部屋の中でまでそのヴェールをしているのか。鬱陶しくないのか」

レオポルドだけでなく、誰にも顔や左手首の傷を見られるわけにいかないから、室内でも常にヴェールを被っていたが、そうでなくて部屋着でリラックスしていたらどうするつもりだったのだろう。いくら間もなく結婚する相手とはいえ、遠慮がなさ過ぎる。アニーは少々ムッとして、レオポルドに手を引かれてと部屋を出ようとするラウラの後を追った。彼は振り向くと迷惑そうに言った。

「そなたは来ずともよい。氣のきかぬ侍女だな」

ラウラはつい笑ってしまった。それからアニーに「お前は少し休んでいなさい」と優しく言った。

それから、彼は慣れた足取りで後宮の目立たない所を通り、使用人の利用する出入り口からラウラを連れて外に出た。そこでは少年が分かった様子で馬を連れて黙って立っていた。レオポルドは「よくやった」と少年を褒めてから、軽々とラウラを抱き上げて馬に乗せ、自分もその後ろに座ってあっという間に王宮を抜け出して森へと入っていった。

そして、慣れた綱さばきで、トマスたちの村へと馬を走らせたのだ。だが、フリッツ・ヘルマン大尉もレオポルドとの付き合いが長い分、どこへ行ったかすぐにわかったらしく追って来たようだった。レオポルドはさらに馬を走らせて王宮とは反対側の道を進んだ。強引だが乱暴ではなく、ラウラも不思議と怖れを感じなかった。それよりも、先ほど彼とトマスが話していた内容に驚きを隠せなかった。

「陛下。こちらのお医者様は、貧しい者たちの所にでも診察に行くのですか？」
「ああ、診察費は王家が負担している。もちろん数が多いので、貴族が服用するような高い薬は使えない。だが、実際には正しい休みかた、清潔な処置、民間でも簡単に手に入る薬草などで救える命もたくさんあるのだ」
「お医者様が、派遣されるのを嫌がったりはなさらないのですか」
「ボウマーやロシュはもともと貧民の出で、疫病で両親を亡くしたからな。年々、平民出身の医者の数が増えているので、以前よりずっと状況はよくなっている」
「平民出身の方が、どうやって学費を？」
「学費を余が負担したのだ。ボウマーたちはずいぶんと肩身の狭い思いをしたらしいが、諦めずに医学を修めてくれたのは、高い医療費を払えない貧しい者たちを一人でも救いたいと言う熱情があっての事だ」
　ラウラは黙って王の顔を見つめた。レオポルドは小さく笑った。
「はじめてトマスに逢ったのは、《シルヴァ》でだった。余は、単にお目付役のフリッツから逃れたくて馬で遠乗りに来ていた。ガリガリに痩せたトマスは苦くてまずい木の実を集めていた。それを食うのだと。そして弱った家内に持って行くのだと」
　それから、レオポルドは少し遠くを見つめた。ラウラは黙って彼が続きを話すのを待った。
「翌日、城の広間で山積みになっていた焼き菓子をごっそりと集めると、トマスが住んでいると言っていた村へ行った。ひどい状態だった。飢えていたのはトマス夫婦だけではなく、村にはろくな食料がなかった。山のようにあったはずの菓子は、一人一つくらいしか渡らなかった」
　レオポルド少年は、そのことを教師のディミトリオスに訊いた。貧困と飢えに苦しんでいるのはトマスの村だけではなかった。ディミトリオスは貧困の連鎖について、わかりやすく説明してくれた。そして父王に簡単に貧困問題を解決できない事情も。
　レオポルドは無力な少年である事を恥じた。旱魃が解消され、少しは状態が良くなってきた村人たちと少しずつ交流しながら、王宮では知り得ない事情を目の当りにした。ディミトリオスは、彼が時々王宮を抜け出して行くのを知っていたが、好きなようにさせておいた。トマスたちはディミトリオスのような系統だった教育は出来なかったが、若き青年に権力者として必要な健全な感覚を植え付ける事の出来る大切な教師だったからだ。権力を手にするまでに、王子が学ぶべき事は山のようにあった。
「国王になりさえすれば、トマスたちを簡単に楽な暮らしに導いてやれると信じていた。だが、もちろんそんな単純な問題ではなかった。トマスたちと『デュランの旦那』は友だちだが、王は自分の友だちだけを優遇する事は許されない。だから、王に出来る範囲で、ルールを変えて行くしかない。貧しい医学志望者の援助はそのわずかな成果の一つだ」
「大きな成果ですわ、陛下」
ラウラは静かに言った。
　なんという違いであろう。ザッカとともに見た、あの貧しく救いの

ない貧民街では、多くのルーヴランの民が無駄に死を待つばかりだった。彼らは終油の秘蹟は待っていたが、医者の診察などは夢みる事すら許されなかったのだ。

「見なさい。あそこが医学アカデミーだ」

レオポルドは、《シルヴァ》が終わり開けた日当りのいい所にある石造りの長屋を示した。城の近くにあった歴史のある建物の施設は古く、多くの学生が学ぶ事は空間的にも無理だった。かつては特権階級だけが入学していたので新しい入門者は年に二人か三人だった。だからそれでもよかったのだ。王位についてレオポルドはまず、この旧アカデミーに平民を入学させようとしたが、視察をしてそれが無理だと悟ったのだ。

「現在は、年間三十人の入学者でも問題はない。空間の問題を盾に、平民の入学を断っていたジジイどもは黙るしかなくなった」

レオポルドは笑った。ラウラは、力なく横たわり死を待つだけのルーヴランの貧しい病人の事を思った。

「グランドロンに生まれた人々はたとえ病に伏せる事になっても希望があるのですね」

彼女の深いため息を聞いて、レオポルドは笑った。

「ルーヴランにはまだ民間の医学志望者が通える学校はないと聞いている。それならば、ここにルーヴランの者たちも受け入れよう。あちらで学校を立ち上げるまでの間、一人でも多くの医者を輩出できるだろう」

ラウラは驚いてレオポルドを見た。宰相ザッカはグランドロン人がルーヴランの民が死に絶えるのを待っているように言っていた。特にレオポルド二世は、ルーヴランの国力が弱るのを待って遅かれ早かれ併合するつもりだと。だから、その前に奇襲をかけなくてはならないのだと、そう彼女を説き伏せたのだ。ルーヴランの民を守るためには、グランドロンを倒し、フルーヴルーウー領を奪い、ルーヴランを豊かにする事、それしかないのだと。

けれど、そのレオポルド自身が、ルーヴランの貧しい民を国王エクトール二世以上に思っている。何もかも間違っていたのだ。自分は愚かな井の中の蛙だった。もっと別の形でこの王を知りたかったと、ラウラは思った。上に戴きたい君主とは、こういう人の事を言うのだと。たぶんこの王のためなら《学友》にされ鞭で打たれるとしてももさほど辛くなかっただろう。そして、自分はその人と国を滅ぼすためにここにいるのだ。

「その馬鹿げたヴェールを外せ」

レオポルドは不意に言った。

「余はそなたと腹を割って話している。きちんと目を見て話したいのだ。古くさい伝統はそれ以上に大切なことなのか」

「いいえ。私も陛下の目を見て話しとうございます」

ラウラは覚悟を決めた。全て終わりにするきっかけを待っていた。祖国を裏切り、哀れなアニーにも害が及ぶことになるが、それでもザッカの計画にこれ以上加担するつもりにはなれなかった。

ゆっくりとヴェールを上げると、王の表情がはっきりと見えた。彼の瞳は漆黒ではなくて濃い茶色だった。強い眸の光は信頼と好意に満

ちている。だが、その黒い眉がふと顰まった。
「緑の瞳ではなかったのか。伝聞はあてにならぬな」
「違うのは瞳の色だけではございません。髪もこの色ではないのです。濃く長いヴェールをしなくてはならなかったのは姫の絵姿と似ていないからだけではなく、これをも隠さねばならなかったからでございます」
潤んだ瞳で王を見つめながらゆっくりと左腕を上げると、右手で袖をまくり上げて未だ完全には塞がっていない醜い傷痣を見せた。

レオポルドは、しばらく口を利かなかった。だがひどく驚いた様子も見せなかった。怒りに震えているようでもなかった。ラウラには彼の表情にわずかな失望の色が浮かぶのがわかった。
「そなたはいったい誰なのだ」
恐るべき冷静さだと思った。なんという精神力なのだろう。彼女は自分の声が震えているのを感じた。
「ラウラと申します」
「……。ラウラ・ド・バギュ・グリ、《学友》か」
「はい。《学友》でございます。けれど、バギュ・グリ家の者ではありません。名もなき捨て駒でございます」

その時、森の奥から蹄の音が聞こえてきた。
「陛下ーッ！」
ヘルマン大尉の声だった。樹々が大きく揺れると大きな黒駒が飛び出してきた。
「陛下！　その女は、ルーヴラン王女ではございませぬ！」
いずれにしてももう露見したのだ。彼女は少しだけほっとした。少なくともこの国王に自分の口から言えたことを嬉しく思った。
「何事だ、フリッツ」
「賢者様が、先ほど登城され、ルーヴランとセンヴリの謀の情報をお持ちくださったのです。婚儀で城の守備が薄くなるのを狙って襲う計画だと……」
そう言いながら馬から飛び降りたヘルマン大尉はラウラにサーベルを向けた。
彼女は動かなかった。動いたのはレオポルドだった。サーベルとラウラの間に腕を伸ばして言った。
「よせ。フリッツ。この女はちょうど今、真実を語りだしていたところだ」
「陛下！」
「すぐに城に戻るぞ。いいか。我々が氣づいたことをルーヴランに悟らせてはならぬ。この女の尋問は城で極秘裏に行う」
「はっ」
ラウラは人ごとのように森の奥を眺めていた。

逮捕

王宮に戻ると、王はヘルマン大尉とわずかな護衛を連れて、執政室にラウラを連れて行った。彼女はそこで後ろ手に縛られ、床に座らされた。時を置かずにヘルマン大尉の副官、ブロイアー中尉が誰かを連行してきた。最初に見えたのはやはり後ろ手に縛られたアニーだった。ラウラの姿を見るなりアニーは目に涙を浮かべて言った。

「申しわけございません。私の不手際のせいで……」

ラウラは首を振った。

「ラウラ様も……先生も……」

泣きながら小さく続けた言葉に、彼女は眉をひそめて、侍女を見た。それから、再び扉が開けられて連行されてきたのは、他でもないマックスだった。ラウラは自分の目が信じられなかった。

ブロイアー中尉が口を切った。

「マダム・ベフロアが、姫の侍女のこそこそした動きを不審に思い、ハイデルベル夫人付きのペレイラ嬢に進言したのです。そしてペレイラ嬢が内密に調べた所、この侍女が大量に血の付いた包帯を隠していることがわかりました。姫君がそのような怪我をしているのに医師に見せないのはどう考えても不自然と、誰の血痕なのか、侍女を拘束して尋問するつもりでおりました」

ヘルマン大尉が言葉を継いだ。

「私どもは賢者殿が、恐るべき陰謀についての情報を持っていらしたので、この女が偽物であるという事がわかり、陛下とこの女を探していました。その間に、賢者殿の従者として城に上がったこの者が、あろうことか拘束中のこの侍女を救い出し、この女の行方を聞き出そうとしたのです。当然すぐさま捕らえる事となりました」

ヘルマン大尉は、後ろ手に縛られたマックスを手荒に突き倒してラウラの隣に膝まづかせた。彼女は蒼白になってレオポルドに懇願した。

「陛下。どうか、お聞きください。私の事は、ご明察の通りです。何の弁解もございません。でも、この方は、この事には全く加担していないのです。本当に何もご存じなかったのです」

「加担していないならば、なぜ侍女に近づき逃がそうとした」

レオポルドは厳しい目でマックスを見下ろした。ラウラはうなだれた。

「私が、私が巻き込んでしまったのです。先生は同情してくださっただけです。ああ、なんてこと」

レオポルドはもっと厳しい目でマックスを見据えると訊いた。

「この女の申す事は本当か」

「本当の事なぞ、どうでもいい。国同士の確執や陰謀にも関わりたくない。僕はただ、将来を誓った娘の命を救いたいだけだ」

マックスの言葉に、彼女ははっと顔を上げた。彼はラウラを見て頷いた。

「君を救って、二人で自由に生きたかった。それが不可能なら、せめて最後まで君の側にいる。君を一人で死なせたりなんかしない」

レオポルドはその二人を冷たく見ていた。先程よりも強い苛立ちと不快感が見て取れた。それをようやく押さえつけると、静かにヘルマン大尉に命じた。

「三人とも牢に入れろ。もちろん、別々にだ。情報が漏れぬよう、誰であるかはわからぬようにしろ。とくにその口の軽そうな侍女がもの

を言えないようになんとかしろ」
それからラウラとマックスに言った。
「勝手な事をすると、お互いの命に関わるぞ。考えるんだな」

三人が連れて行かれると、王はどっかりと椅子に座った。右肘をついて両目を手のひらで覆い、しばらくそうしていた。

戴冠してすぐ、一度だけ戦に負けた事がある。戴冠のどさくさにルーヴランに宣戦布告をされて西ノードランドを失ったのだ。あの時の背筋が寒くなるような焦りと不安を思い出した。国を治める事が怖くなり、何もかも投げ出したくなった。背中を見続けてきた父はもうこの世にはいなかった。母は贅沢にしか興味がなく頼りにならなかった。ヘルマン大尉をはじめ、臣下のものは不安な瞳で、怯えていた。そう、誰も、先程の青年のように命を投げ出してでも状況を変えようとする強い勢いをもっていなかった。ただ、父王が生涯師事し続け、自分の教育もしてきた年老いた賢者だけが、穏やかで光をたたえた目つきで、じっと待っていた。
「どのようにでも構いませぬ。王よ、決断なされませ。あなた様はこの国を率いなくてはならぬのです。年若いなどという言い訳は許されませぬ。ただ、決断なされませ。そして全てを背負うのです。それが王たるものの宿命ですぞ」

迷いを真に克服できたのは、同じ相手に挑んで今度は勝ち、領地を奪回できた時だった。戴冠したてのレオポルドは、まだ自分が国を治める覚悟ができていなかった。父に仕えていた将軍をはじめとする廷臣たちも、若い王に対して信頼を寄せていなかった。彼らは覇氣がなく、それでいながら、それぞれのやり方に固執し命令系統がバラバラだった。レオポルドは、父王に仕えていた軍人たち中心の指揮系統を一新し、経験は少なくとも若くアイデアに満ちて、レオポルドに従う若い軍人たちを中心に作戦を練り直した。その中心となったのが親友でもあるヘルマン大尉だった。その賭けが実を結び、全ノードランドを再びグランドロンのものとすることができた時に、レオポルドは真の王としての自信を持つことができたのだ。

今、あの時と同じ敗北感が襲ってきている。謀は未然に防がれたというのに。ルーヴランに騙された事ではない。噂の宰相ザッカならそれくらいの事はやるだろう。レオポルドは先程の二人の姿を思い浮かべた。かつて、叔母とその夫の睦まじい姿を見て胸に育てた小さな憧れ。来週には実現するはずだった未来。裏切られたのはその未来にだった。

「陛下。お邪魔して申しわけございません」
フリッツ・ヘルマンの声にレオポルドは不機嫌な表情のまま顔を向けた。
「なんだ」
「賢者殿が陛下にお話があると」
「陰謀の全容をそなたが聞いたのではなかったのか」
「それが、それとは別のお話だとおっしゃるのです」
「この件が終わってからにしてくれ」
「それが、どうしても今でないとならないとおっしゃるのです。断ら

れたら、マリー＝ルイーゼ王妹殿下のご遺言に関する事だと、お伝えしてほしいと」
レオポルドは眉をひそめていたが、たった今想っていた叔母の名に、意見を変えた。
「わかった。通してくれ」

国王と貴婦人

昼の時間を十分ほど過ぎてから、ハイデルベル夫人は暇を告げて御者が扉を開けて待つ華奢な馬車の中へと消えて行った。最後まで昼食を出すべきか迷っていた使用人たちはほうっと息をついた。
「ここのところ、毎日ですものねぇ」
「宮廷奥総取締の女官長が仕事もそこそこに何を話されているのかしら」
ハイデルベル夫人は宮廷奥総取締を二十年近く勤めていた。王太后や、十年前に薨去したマリー＝ルイーゼ前王妹殿下の信頼も厚く、彼女に会いたい人間は自分から王宮に行くのが筋だった。けれど、この森にわざわざ通い詰めている。使用人たちが首を傾げるのも不思議はなかった。

「どうしてもわからない。奥方様はいったいどこの誰なのかしら？」
野菜の皮を剥きながら下働きの娘がつぶやけば、床を掃除していた下男はニヤニヤとして言った。
「そりゃ、国王陛下の大事なお方でしょう。ここは陛下の持ち物なんだから、他にはあり得ないよ」
「でも、それにしては陛下は一度もお見えになっていないじゃない」

奥方様と呼ばれている女は、一週間ほど前にヘルマン大尉が馬車で連れてきたのだ。朽ち葉色をした艶のある髪を、後ろできっちりと結わえ、飾りの少ないが質のいい灰色のドレスを着ていた。ヘルマン大

尉はこの女を貴婦人として扱い、丁寧に世話をするように申し付けたが、こうも付け加えた。
「奥方様が外出したいと申し出られたら丁重にお断りするように」
つまり、この女はこの《シルヴァ》にある国王の狩猟用別荘に軟禁されているのだった。
「するってえと、あれかな。ヘルマン大尉の愛人かな？」
下男の想像はますますおかしな方向に向かっていた。

午後になると、再び馬車が向かってくるのがわかった。
「なんと、今度は王家の馬車だな。王太后様か？」
使用人たちは緊張して入り口に並んだ。中から飛び降りるようにして出てきたのは、国王その人だった。足取り軽く、貴婦人のいる居間に入ると、使用人たちを人払いした。女中たちは、やはりというように目を合わせると控えの部屋へと出て行った。

「しばらくであった。ラウラ。足りていぬものはないか」
「おっしゃる意味が分かりません。私はなぜこのようにもてなされているのでしょうか」
「なんだ、知らぬのか。ハイデルベル夫人に訊かなかったのか」
「ヘルマン大尉がここへ私をお連れになった時に、陛下以外にこの待遇の意味を質問してはならぬとおっしゃいましたので」
「ああ、そうか」
「私は、いつ処刑されるのでしょうか。結婚式の予定だった昨日だと思っていましたが、何も起こりませんでしたので、ぜひお伺いしたいと思っておりました」
「ああ、それも知らぬのか。ルーヴランが送り込んだ偽物の姫なら、あの翌日に処刑した。血塗れた婚礼衣装と縛り付けた侍女を送り返したら、翌日にはセンヴリの奴らが寝がえって贈り物をしてきた。ルーヴランはこちらが宣戦布告をする前に、勝手に直轄領の一部と《シルヴァ》の四分の一を差し出してきた」
ラウラは眉をひそめて訊き返した。
「どなたを処刑なさったのですか」
「豚だよ」
「まあ」
彼女は大きく目を見開いた。それから視線を落とし、しばらく迷っていたが、やがて思い詰めた様子で国王を見た。
「ティオフィロス先生は……」
レオポルドは、きたかという表情をした。
「氣になるか？」
「もちろんでございます。罪のないあの方を巻き込んでしまったのは全て私の咎でございます。あの方には、お国に対しての叛心はまったくございません。どうか……」
国王は、言い募るラウラを制した。
「心配はいらぬ。そなただけを助けたのではない。そもそも彼が情報をもたらしてくれたので、我らは速やかにルーヴランの奸計に対処することができた。動機はどうあれ、彼のその行動が国を救ったことは事実だからな。それに、老師の助命嘆願を無碍にして、そなたの命だけを救うのは公平ではないだろう」

彼女はほうっと息を一つついた。
「なぜ、私をお救いくださったのですか？」
「そなたを死なせたくない人間が三人いたからだ」
「三人？」
「一人はハイデルベル夫人だ。つい先日までは、何を隠しているのかわからず怪しいと言っていたくせに、そなたの境遇を聴いて以来、同情でいても立ってもいられないと」
彼女は困ったように笑った。
「先程もご親切にもお見えになりましたわ。お忙しいでしょうと申し上げたのですが……」
「あれは極端な女でな。毎日戻ってきては、どれほどそなたの知識が豊富で宮廷の奥のことに精通しているか、延々ときかされているのだ。数年後に宮廷奥総取締職を辞す時に代わりを託せるのはそなたしか考えられぬと言い出している」
「ルーヴランの、肉屋の孤児に、ですか？」
「まあ、身分はなんとかせねばならんだろうな。いずれにしても現在そなたには名がない」
「……私を死なせたくないとおっしゃっている後の二人は？」
「余と、それから余の従兄弟のフルーヴルーウー伯爵だ」
ラウラは首を傾げた。
「それは、行方不明になられている方ではありませんか？」
「そうだ。見つかったのだ。ただ、本物の証だけが欠けている。別の人物の手に渡っているのだ」
「……誰の？」
王はラウラの襟元に光る黄金の十字架に手を伸ばした。
「そなたの首にかかっている、これだ」
彼女は、黙って考えた。それから、ゆっくりと息をつくと十字架を外し、王の手に載せた。王はその十字架を裏返し、双頭の馬の文様とその間に収められたルビーを確認した。間違いなく、かつて叔母が触らせてくれたフルーヴルーウーの家宝だった。彼女はそのレオポルドの手の中にある十字架を見つめていたが、やがて黙って下を向いた。
「どうした。誰の事を言っているのかわかっているのだろう？」
「つまり、ティオフィロス先生がお話しになっていた《黄金の貴婦人》とは、王妹マリー＝ルイーゼ殿下だったのですね」
「そうだ。余の大切な叔母、前フルーヴルーウー伯爵夫人だったマリー＝ルイーゼだ。命を付けねらう狡猾なジロラモ・ゴーシュから守るために、伯爵マクシミリアン・フォン・フルーヴルーウーは密かに賢者のもとでマックス・ティオフィロスとして育てられたのだ。そなた、嬉しくないのか？」
一度氣のない様子で首を縦に振ったラウラは、やがて横に振りなおした。
「なぜ？」
「あの方のために、お喜びしとうございます。でも……。陛下はお笑いになるでしょうね。これでも私にも夢があったのです」
王は黙って先を促した。彼女は窓の側に寄り、深い《シルヴァ》の森を眺めた。
「かつて、《学友》を勤め上げて自由になったら、自分の足でこの森を

歩いていきたいと、そう夢みて生きてきました。姫が二十歳になれば、わたしは自由になれるはずでした……」
「自由になったなら？」
「街から街へ、国から国へ、ティオフィロス先生の向かう街で一番美味しい食事処の女給となって、働いて暮らそうと」
「待て。それがそなたの夢なのか？　なぜ、女給なのだ」
「あの方が足を向け食事にいらっしゃり、その日のことを話してくださるのを待つことができますから」
　国王は大きなため息をついた。
「随分ささやかな夢だな」
「振り向いてくださらなくてもいい。ただお目にかかってお話が出来ればいい。生まれた身分が違うから、それ以上の期待はしていませんでした。でも……」
　ラウラは一筋の涙をこぼした。
「身分の違いなどない、鍛冶屋の次男だとおっしゃってくださった。どこか遠くで一緒になろうと。それが叶わぬのならば、せめてこの身の終わる時まで側にいてくださると。それがとても嬉しかったのです」
　けれど、彼はマクシミリアンだった。フルーヴルーウーの伯爵、しかも王妹の血を引く、王位継承権一位の貴人だった。ルーヴランの孤児との結婚はおろか、もう二度と氣ままな旅などはしないだろう。街の食事処や居酒屋などにも顔は出すこともなければ、囚人を訪れることもないだろう。
「終生罪を償わねばならぬ身で、何を馬鹿な話とお笑いくださいませ」
「言ったであろう。ルーヴランの送ってきた偽物の姫は、既に処刑された。この世には、その罪を問われる者はもうどこにもいない。かといって、そなたが女給になるという案には賛成しかねるが」
「陛下？」
　レオポルドは、しばらく黙ってラウラの顔を見ていた。それから視線を逸らすと《シルヴァ》の奥で羽ばたく鳥を目で追いながら言った。
「何度も考えた。他に道はないのかと。どこか辺境の貴族の娘ということには出来ぬか、バギュ・グリ侯爵に正式に申し込むのはどうか、ただ、このまま森の中に生涯隠し通すことは出来ぬか」
「おっしゃる意味が……」
　ラウラの唇に人差し指をあてて、王はそれを制した。
「余は、そなたと結婚して共にこの国を治めていきたいと真剣に願ったのだ。だが、国王にもどうすることも出来ないことがある」
「陛下」
「余が権力でもってそなたを我がものにすれば、マクシミリアンは余を憎むようになる。危険な存在になり、取り除かねばならなくなる。だが、死の床で息子のことを頼むと懇願した叔母との約束は違えられない。女のために臣下を殺した暗君とみなされれば、国を治めるのも楽ではなくなる。味方にすれば博学で信頼に足る従兄弟を失うのも馬鹿げている。それに、そうまでして奪ったとしても、そなたの愛は得られない、そうだろう？」
「陛下。私は、陛下のような主君を戴く国に生まれとうございました。心から尊敬申し上げております」
ラウラは真剣に言った。

王は目を閉じると、しばらく黙っていたが、やがてしっかりと頭を持ち上げて、ドアの方へと向かい扉を開けて控えの間にいる女たちを呼んだ。
「お呼びでございますか、陛下」
女たちは小走りに部屋に入ってきた。
「奥方様の外出の用意をするように。半刻後に、外の馬車に乗せるのだ」
ラウラは驚いて、レオポルドの方を見たが、王は振り返らずに部屋から出て行った。

失われた伯爵

今から一週間ほど前の事だった。レオポルドは逮捕されて牢で一晩を過ごしたマックスを訪ねた。牢の中から半ば敵意をもち、半ば絶望したように見る彼に、国王はなんと声をかけるべきか迷った。ずっと探していた従兄弟がここにいる。よく見れば叔母の面影がある。叔父フロリアンにもよく似ている。
「そなたは何者か、名乗れ」
ようやく口を開いた国王の声が、前日のような怒りや憤りの感じられぬ戸惑ったものだったので、マックスは拍子抜けした。それから格子の方に近づくと膝まづいた。
「マックスと申します。鍛冶屋の次男でございます。陛下と同じくディミトリオス様に師事し、二年前ティオフィロスの姓を頂戴しました。それから教師として生計を立てております」
手元に十字架がない今、自分が本当はフルーヴルーウー伯らしいと言っても通じない。自分自身でも信じられない話をどうやって自分を懲らしめようとしている国王に信じさせられるというのだろう。
「その両親は息災か」
「存じませぬ。十歳の時に、ディミトリオス様に引き取られて以来会う事を禁じられておりました。独立してから会いに参りましたが、何処ともなく立ち去ったとの事でございました」
「老師に聞いたが、そなたは黄金の十字架を持っているそうだな」
マックスは驚いて顔を上げた。真剣な目で見下ろしている国王と目が合った。ディミトリオスが十字架を取り戻す前にその話を国王にし

たとは夢にも思っていなかった。
「いいえ。十字架はラウラが持っているはずです。もし、彼女が手放していなければ」
「その十字架を、そなたはどうやって手に入れたのだ」
「ある貴婦人が……ディミトリオス様を訪ねてこられた《黄金の貴婦人》とお呼びしていた方が、私にくださいました。この十字架だけは、決して手放すなと、いつの日か心を込めて国王陛下にお仕えするようにと、おっしゃいました。私は、誰よりも大切に思っていたあの方との約束を二つとも破る事になってしまいました。それでも、どうしてもラウラを救いたかったのです」
国王はサーベルを抜くとゆっくりとマックスの後ろにまわした。マックスは頭をもっと下げる事になり、後ろの首があらわになった。そして、王はそっと首筋にかかっている襟を更に下にずらした。そこには斜めにならんだ二つの黒子が、少し薄くなった色できちんと残っていた。子供の頃に従兄弟の首筋に見たのと全く同じだった。
レオポルドは小さく息をつくと、後ろに控えていたヘルマン大尉に言った。
「縄を解き、牢から出して、ブランシュルーヴの間に連れて行け。客人として扱え」
「陛下！　ご乱心あそばれたのですか？」
「いいか、誰にも知られてはならぬ。ここにいるのはフルーヴルーウー伯爵だ」
ヘルマン大尉は腰を抜かすかと思った。マックスも証拠もなしに国王が自分を受け入れた事を意外に思って何かを言おうとした。レオポルドは静かに言った。
「黄金の十字架は他の者でも持てる。伯爵を殺して奪えばいいのだ。だが、叔母の腕に抱かれた赤子をこの目で見た余の目は誰にも誤摩化せぬ。そなたが本物である事は余が証し、それを覆せる者はおらぬ。だが、今は余計な事をするな。そなたが誰であるかをまだ誰にも告げてはならぬ。もし、そなたが未だにラウラの命を救いたいと思っているのならば」
「彼女は、どうなるのです。無事なのでしょうか。私はどうなってもいい。差し出せるものがあるならばどんなものでも差し出します。どうか、彼女を……」
「言ったであろう。余計な口はきくなと」
それからの一週間、マックスは食事もろくに喉を通らなかった。ブランシュルーヴの間と呼ばれる客間は、青空に向かう美しい天使たちを描いた豪華な天井画と、たくさんの窓のある広い部屋だった。中央にある天上の高い白亜の居室の他に寝室の小部屋と、召使いの控える小さな空間など五つほど備えていた。しかし優雅に見えるのは内側だけであり、バルコニーに出ればそこが二百フィートほどの掴まるもののない塔の上に備えられている事がわかる。飛び降りれば死ぬ他はない。
彼に付けられた召使いは三人ほどの若い娘たちだったが、部屋の中には常に二人の屈強な男たちがいてマックスが余計な事をしないか監視をしていた。
ラウラがどこにいるのか知りたくて、召使いの女たちのおしゃべり

に必死で耳を傾けた。
女たちはおかしな事を話していた。ルーヴランの謀が明らかになり、その日のうちに偽の王女は殺されて、血塗れた衣装と侍女が送り返されたと。
だが、それでは話が合わない。レオポルド二世はまだ彼女が生きているような事を言っていた。そんな嘘をつく理由がどこにあるのか、それを彼に隠し通せるはずなどないのになぜそんな事を言ったのか。ましてや、この口の軽い女たちがペラペラと喋るままにさせておくとはどういうことか。
女たちはマックスが誰か本当に知らないようだった。彼女たちは「旦那様」と言った。一般的な貴人に対する呼称だ。彼が誰であるかを隠し、彼に報せるべきでない情報は隠さない。それを考えあわせると、どうやらラウラはまだ死んでいないと考える方が自然だった。
露見したあの場で、王は即座にラウラの処刑を申し渡さなかった。それどころか誰であるかわからぬよう、自分から誰であるかも言わないように口止めして引き離した。どういうことなのだろう。

「旦那様」
召使いの声にはっとして振り向くと、一番年長の女が戸惑ったように側で声を掛けていた。
「すまない、考え事をしていた」
彼は謝った。
「あの、これから国王陛下がお見えになるそうです。それでお召しかえを……」
彼は、肩をすくめた。いま着ている白いシャツも、質のいい黒いズボンも、自分の給料で買った、王侯貴族の前に出るための一張羅よりもずっと質のいいものだった。だが、どうやらこれは普段着らしい。彼は頭を振った。
「わかった、着替えよう」
小部屋に用意された服は、上質の絹で肌触りは最高だった。セルリアンブルーのしっかりとした緞子の上着は少し重かったが、どうやってこれほどぴったりくるものを誂えたのだろうと驚くほど彼の体に馴染んだ。
上着の袖から出たレースの白い袖を見て、彼はやれやれと思った。未だに自分がフルーヴルーウー伯爵であることがよく把握できていない。当分慣れないだろう。一介の教師の方が肌に合っているのに。
がちゃがちゃと、護衛の一団が階段を上がってくる音が響き、マックスは本当に国王がここにやってくるのだと思った。
開かれた扉の向こうにレオポルド二世その人とヘルマン大尉、それにその部下たちが続いているのが見えて、彼は頭を下げた。

「久しぶりであったな、伯爵。ごきげんいかがかな」
国王にそういわれて、彼は頭を下げたまま、なんなんだとひとり言を飲み込んだ。
「お氣づかい、おそれいります。国王陛下に於かれましては、ご健勝の事とお慶び申し上げます」
教師時代の王侯貴族に対するセリフはスラスラと出てくる。これからどうなるのかと考えつつも。

「余は元氣だ。そなたに用意した伯爵夫人も息災だ」
　それを聞いて、彼は反射的に顔を上げた。再び反感の混じった目つきを見てレオポルドは嬉しそうに笑った。
「そなたの母が死の床で余に頼んだのだ。そなたを助け、支えてほしいとな。余が伯爵家にふさわしい貴婦人を妻として贈るのも、そのひとつだ」
「恐れながら、陛下。私には将来を誓った……」
彼がいい募ろうとするのをレオポルドは止めた。
「まあ、そういうな。先に娘を見てから言うがいい」
そう言って、扉の所で控えているヘルマン大尉に目配せをすると、大尉はドアを開けて、そとから水色のドレスを着た女を中にいれた。
　マックスは自分の目が信じられなかった。
「ラウラ……」
「マクシミリアン様……」
　ラウラは目に涙を溜めて、そこに立ち尽くしていた。彼が手を差し伸べると、レオポルドは彼女の背中を押した。彼女はそのまま夢にまで見た男の腕の中に飛び込んだ。
「そう。これで、真のフルーヴルーウー伯爵と、その証の黄金の十字架、そして伯爵夫人が揃ったというわけだ」
国王の言葉に、召使いの女たちが思わず驚きの声を漏らした。その三人を見て、国王は厳しい顔をして言った。
「まだ伯爵夫妻がここにいる事を場外にもらしてはならぬ。そなたたちは、しばらくこの塔から外に出る事を禁じる。余がいいと言うまでな」

奸臣の最後

　フルーヴルーウー伯爵領の代官として長い事あいだ権勢を誇った子爵ジロラモ・ゴーシュが死の床についているという噂は、グランドロン王国を駆け巡った。先代伯爵、フロリアン・フォン・フルーヴルーウーが不慮の死を遂げて以来、ゴーシュは伯爵領を思うがままにしてきた。前伯爵もそうだったように、その後もゴーシュにとって都合の悪い人物はことごとく急に亡くなったが、その死をゴーシュの仕業だと確定する証は何もなく、死神を味方につけているに違いないと怖れられていた。幼児の頃に行方不明になって久しい現伯爵、マクシミリアン・フォン・フルーヴルーウーも、あるいはもう死神の手によってあの世に連れ去られたのであろうというのが、市井の見方であった。
　五年前に新しい国王が即位した時に、人びとはフルーヴルーウーは直に国王の直轄領になるであろうと噂した。フロリアン夫妻には他に子供はなく、一番近い近親者は伯爵夫人の甥にあたるレオポルド二世その人であった。しかし、ゴーシュ子爵もまた三代前の伯爵の血を引く娘と結婚しており、これまでの功績を盾に、自分を新たな伯爵に任命するようにと事あるごとに国王に迫っていた。国王の返事はただ一つだった。
「わが従兄弟マクシミリアンが亡くなった証がみつかるまでは、それはまかりならぬ」

ディミトリオスは、今は亡き伯爵夫人、マリー＝ルイーゼ王妹殿下の遺言を果たすために身近で育てたマクシミリアンに知識を総動員してありとあらゆる毒薬への耐性をつけさせたが、その伯爵を国王のもとに連れてくる事はできなかった。ゴーシュがどのような手段で前伯爵をはじめ、邪魔な人間を次々と手にかけたのかわからなかったからだ。

さらにいえば、フルーヴルーウー伯爵位とその豊かな領地を狙っているのはゴーシュ子爵だけではなかった。初代フルーヴルーウー伯ハンス＝レギナルドはバギュ・グリの《型破り侯》テオドールの臣下であり、伯爵夫人ユリアはバギュ・グリ侯爵令嬢であった。そのため、現バギュ・グリ侯爵アンリ三世はフルーヴルーウーの相続権を主張していた。ルーヴランが奇襲で奪おうとしたことからわかるように、ルーヴラン側はフルーヴルーウー伯爵領に魅力を感じて狙っている。つまり、たとえ正統な伯爵マクシミリアンが見つかったと宣言しても、偽物だと言いがかりをつけて相続を主張する可能性も高かった。

だからディミトリオスは、マリー＝ルイーゼ王妹殿下との取り決めを国王に打ち明け、伯爵の生存を明らかにする時期を慎重に待っていたのだ。少なくとも、ジロラモ・ゴーシュがもっと弱り、さらに、王女との婚姻問題にカタがつき、ルーヴランとの関係が安定化するまでは、自分の胸の内に納めておくはずだった。だが、ルーヴランの偽王女を救う騎士の役割を買ってでて、事もあろうにマクシミリアン本人が逮捕されてしまったので、全ての計画は狂ってしまった。

だが、結果として、全ては上手くいった。マクシミリアンはその妻とともに、ディミトリオスが考える限りグランドロン王国で最も安全な場所に匿われる事となった。

「もう、いいのではないか？」

レオポルドは人払いをして自室に呼び寄せた賢者に訊いた。

「お待ちくださいませ。死の床についているというのも、もしやあのずるいオオカミの策略やも知れませぬ」

「だがな、老師よ。そろそろこの城でも噂になっているのだよ。滞在している謎の夫婦は何ものかとね」

「恐れ入ります」

「大体、なぜここであの二人を匿わなくてはならぬのだ。お前の所に置けばいいではないか」

「いえ、このお城ほど安全な場所はございませんから。それに、私の所に匿えば、陛下が足繁く通いゴーシュに目を付けられかねません」

「余が足繁く通うなどと、なぜわかるのだ」

「王妹殿下も、何度申し上げてもお忍びでお越しになりましたのでね。かなりヒヤヒヤいたしました」

「余はそなたに腹を立てているのだ。余があれほどマクシミリアンを探していたのを横で見ていたくせに、これほど長く隠していたんだからな」

「王妹殿下に、居場所を報せた事を後悔いたしておりましたので。あ

の方が何度もお越しになる事で伯爵は真の危険に曝されていたのでございます」
「まあいい。で、どうするつもりだ。ゴーシュがくたばるのを何十年も待つつもりか？」
「いえ、いかがでございましょう。お見舞いになど行かれては」
　レオポルドはにやりと笑った。
「つまり、お付きに例の謎の夫婦も連れてという事か？」
「まあ、そういうことになりますかな。申しわけございませんが、今回だけは必ずヘルマン大尉や護衛の部隊もお連れください。なにかありましたら困りますからな」
「わかっておる」

　レオポルドは賢者を見送ると、城内のプライヴェートエリアに向かった。西の塔のかつての伝説的なブランシュルーヴ王妃が使った居室に、フルーヴルーウー伯爵マクシミリアン三世とその妻は匿われていた。
「おい。準備はできているか」
国王はずかずかとブランシュルーヴの間に入っていくと居間を覗き込んだ。
　国王の突然の来訪に召使いたちが慌てたが、居間の暖炉の前でリュートを合奏していた二人は演奏の手を止めて国王を見た。
「何の準備でございましょう？」
「なんだ。出かける準備をしておけと、フリッツは伝えておかなかったのか」
「ヘルマン大尉は、本日お見えになっていませんが」
「わかったから、さっさと準備をしなさい。上手くいけば、今日にでも隠れんぼうはおしまいだ。おい、伯爵にはサーベルを、伯爵夫人に短剣を用意するのを忘れるな」
レオポルドは女中たちに言った。マックスは眉をひそめた。
「陛下、どういう成り行きなのか、ご説明いただけませんか」
「馬車の中で話す。ああ、忘れないように今言っておくが、ラウラ、そなたは先方で何が出ても絶対に口にするな、いいな」
　それで、マックスはわかったような顔になった。
「あの……？」
不安な顔をして見るラウラの頬に手を当てて、マックスは言った。
「毒殺者の所に行くらしい。大丈夫。僕の側にいれば」
　その様子を見て、レオポルドが茶々を入れた。
「心配するな。ちゃんと護衛がついていく。それより二人とも早く準備をしてくれ。部屋着で見舞いにいくのも妙だろう」

　夏の終わりに体調を崩したゴーシュは、名医と評判のボウマー医師の診察を受けるために王都ヴェルドンへと上ってきた。だが、病状が捗々しくなく、領地へ戻ることもできぬまま、ヴェルドン郊外の狩猟用の館で臥せっているのだった。
「これは、陛下が自ら足をお運びくださるとは、何とありがたいことでございましょう。これはなんとしてでも回復して、一刻も早く登城をせねばなりませぬ」
　そう急いで回復する必要もあるまい、そう思ったがレオポルドは口には出さなかった。
「時に、ゴーシュよ、そなたのかつてからの願いの件だが」

「なんと、陛下、ついにお許しいただけるのでしょうか。私ども夫婦の先王様の頃からのお願いを。ついに、この私めをフルーヴルーウー伯爵としてご任命いただけると……」
「いや、残念ながら、新しいフルーヴルーウー伯爵を任命する必要はなくなったようでな。それを伝えにきたのだ」
「なんですと！　まさか、直轄領になさるおつもりですか！　それはあんまりな。この私めは四半世紀に渡り、あの土地を守り栄えさせてきたというのに」
「いや。そうではなくて、伯爵が見つかったのだ。伯爵だけでなく、その妻は未来の伯爵を身籠っているというおめでた続きでな」
　そう言われて、ジロラモははじめて国王が連れてきた見慣れぬ男を見た。枕元にいたゴーシュ子爵夫人も、皺のよった氣の強そうな額をゆがめた。ジロラモは、先ほどまでの弱々しい態度はどこに行ったかというように、ガバと寝台に起き上がると叫んだ。
「まさか、今さら……？」
「そう、今さらだが、ほら、この通り叔母の言っていた十字架もこうして持っていてだな」
そういって、マックスの胸にかかっている十字架を引っ張って見せた。
「信じるとおっしゃるのですか？　十字架がどのようなものか知っている者ならば、ねつ造することだって出来るでしょう。誰か邪な者の差金に違いない。陛下ともあろうお方が、そんなお人好しなことで……」
　子爵夫人は、夫と国王が話している横をそっと通り、部屋を出て行った。ヘルマン大尉と護衛兵たちはそっと目配せをしあった。
「余には、この者は叔父にも叔母にもそっくりに見えるが、そなたはそう思わぬのか？」
ゴーシュは怒りに震えながら答えた。
「そっくりとは思えませぬ。それに、多少似ていたとしても、他人のそら似ということもございます。替え玉なら多少は似ているものを探すでしょう。こんなに長いこと申し出なかったのに、突然本物だと言われましても、承服できかねますな」
「よいか、ゴーシュ。そなたの前にいるのは国王である余と、現在未婚である余に何かがあった時に王位継承権すら持つフルーヴルーウー伯マクシミリアンであるぞ。いい加減に口を慎め」
「それでは、なんとあっても、そのものを伯爵と認めると……」
「当然ではないか。証もきちんとしているのだからな。見ての通り伯爵夫妻は若くて健康なので、領地を治めるのに代官はいらないであろう。そなたもこれまでご苦労であった。ゆっくりと療養につとめられよ」
　怒りに震えているゴーシュのもとに、夫人が戻ってきた。見れば従っている召使いが四つの銀の盃を盆に捧げ持っている。
「真におめでたいことでございます。それでは陛下、新しい伯爵夫妻、そしてあなたで乾杯をなされませ」
そういって、手前の二つの盃を自らとって、国王と夫に手渡した。それから、残りの二つをマックスとラウラに手渡した。
　ゴーシュ夫妻の目がさりげなくその二つの盃を見ている。レオポルドはわずかに笑って、マックスの盃に手を伸ばした。
「何だそっちの方がたくさん入っているではないか。それを余によこ

せ」
「へ、陛下。陛下にお渡しした盃は、当家の家宝でサファイアがついております……。お酒は、またおつぎしますので……」
それを聞くとレオポルドはマックスの目を見て「そうか」と言った。マックスはラウラに渡された盃を取り上げた。
「大変申しわけございませんが、妻は今、酒を飲むことを医師から禁じられておりまして……」
その言葉を継いで、レオポルドはその盃を子爵夫人に差し出した。
「それでは、そなたと乾杯しよう」
「え……。しかし、これは、お客様用の……」
「この余が乾杯しようと言っているのだ」
子爵夫人は、震えながら盃を一度は受け取った。手が激しく揺れていた。盃を怯えたように覗き込んだ。それからしどろもどろになって言った。
「も、もうしわけございません。私、具合が悪くて、お酒は……」
するとレオポルドは、あっさりと盃を夫人の手から取り上げると控えている医師を振り返った。
「そうか。それなら、ボウマー、お前が一緒に乾杯をしろ。だが、子爵殿だけでなく奥方の診察もしなくてはならないから、飲むのは夜までお預けだ。いいな」
夫人はよろめきながら部屋から出て行った。青ざめたジロラモはその妻の様子を目で追いつつ、吹き出す汗を必死に拭いながらなんでもない振りをしていた。
ゴーシュとレオポルド、盃を受け取ったボウマー医師、そしてマックスは乾杯をし、ボウマーを除く三名が酒を飲んだ。ラウラとヘルマン大尉たちは、酒に何が入っているのか怯えながら見守った。
「どうもゴーシュ夫妻の体調は思った以上に悪いらしい。我々が長居するのは体に触るようだな。そろそろ失礼するとしよう。時に、マクシミリアン、そなた酒は強いのか？」
「ええ。多少、薬草臭い酒でございましたが、酔うほどのものではございませぬ」
ジロラモが、じっと見つめながら頭を下げた。
外に出て馬車に乗ると、レオポルドは言った。
「なんだった」
「東洋のゲルセミン」
「ふむ。下痢をして呼吸困難になるやつだな。量的には問題ないのか」
マックスはちょっと腹をさすった。
「今夜と明日は、この辺の具合が良くないでしょうね。緩慢に効くので、ここでではなく帰ってから死ぬように計算したのでしょう」
ラウラが心配そうに見た。
「心配はいらない。あの量なら、陛下が飲んでも命には別状なかった程度だ。もっともヘルマン大尉や君が飲んだらその保証はないけれど……」
レオポルドは満足そうに言った。
「我ながらいい手だったな。世継ぎを妊娠していると言えば、絶対に

ラウラにも一服盛るという読みが当たったからな」
「ボウマー先生は大丈夫でしょうか。我々のように毒耐性がなければ、あの量でも命に関わりますよ」
「ちゃんとあらかじめ伝えてあるから大丈夫だ。それに、たった今、伯爵が馬車の中で倒れたと伝令を走らせたから、ボウマーはあの盃を余の命で堂々と調べる事ができる算段だ。ようやく物証が手に入り、堂々とゴーシュを告発できるというわけだ」

ゴーシュ邸にいたボウマー医師は、盃に毒が入っていた事をつきとめた。そもそもそのワインは、フルーヴルーウー伯爵夫人に渡すために子爵夫人が自ら持ってきた事、伯爵が東洋のゲルセミンの中毒症状で生死を彷徨っている事を理由に、国王レオポルド二世は子爵の取り調べを命じた。だがヘルマン大尉が再びゴーシュ邸に辿りついた刻には、ジロラモの容態は急変しボウマー医師が神父を呼ぶように指示している所だった。そして、子爵夫人もヘルマン大尉たちから逃れられないと観念したのか、自室でヒヨスを呷って事切れていた。

ゴーシュ子爵夫妻の葬儀を待たずに、国王レオポルド二世は「奇跡的に回復した」フルーヴルーウー伯爵の帰還を公告した。グランドロン王国はもとより、周辺各国でも伯爵再発見のニュースは大きな驚きをもって伝えられる事になった。

フルーヴルーウー伯爵の帰還

ヘルマン大尉は馬車を門番に託すと挨拶もそこそこに館の中に入っていった。娼館《青き鱗粉》は《シルヴァ》の森を見渡す小高い丘の上にある。黒とオレンジを基調とした洒落たインテリアの待合室でマダム・ベフロアことヴェロニカを待ちながら大尉は苛ついた表情を見せた。昼間から高級娼館に出入りしているなどと噂を立てられるのは本意ではなかった。彼女からの伝言を受けて、急いでやってきたのは、もちろん国王レオポルド二世の命によってだった。
「ただいま、マダムがお見えになります」
老召使いがもったいぶって姿を消した。どうでもいいから早くしろ。ヘルマン大尉は扉を睨みつけた。やがて小走りの音がして、扉がわずかに開くとヴェロニカがそっと入ってきた。
「ああ、大尉。お待ちしてましたわ。こちらにいらして」
ヴェロニカは天鵞絨のカーテンが幾重にも重なる、暗い部屋へと彼を誘った。途中にいくつもの扉があって、女たちのきつい香水とクスクスと笑う囁きが聴こえた。彼女たちは昼間から娼館を訪れた酔狂な客だと思っているのだ。「こっちにいらっしゃいよ」白い手がいくつも出てきたが、大尉は迷惑そうにそれを振りほどいてヴェロニカの後を追った。娼館の女主人であるマダム・ベフロアは笑いながら更に奥へと進み、一番奥で鍵を取りだして解錠した。
暗い部屋の中に、幾重にも縛られて猿ぐつわを嵌められた娘がいた。扉が開いたのを見ると二人を睨んで猛烈に暴れた。暗闇に目が慣れた大尉は娘をよく観察した。娼婦のよく着るようなヒラヒラしてだらし

ない服を身につけ、猿ぐつわに真っ赤な口紅が移っていた。だが、その娼婦のなりが全く似合っていない。この子供みたいな顔は、どこで見たのだったか……。
「あの召使いか！」
ヴェロニカが耳元で囁いた。
「そうよ。あの偽王女の侍女。どうやら侯爵にくっついてルーヴランにやってきたみたい。娼婦たちに混じって後宮に入り込もうとしたので、うちの子たちが捕まえたの。警備をかいくぐって陛下に近づこうって魂胆だと思うけれど」
ヘルマン大尉はヴェロニカに口止め料を渡すと礼を言って、アニーを引っ立てると用意してきた馬車に押し込んだ。
あまりに娘が暴れるので、彼はサーベルを鞘から抜くとアニーの首筋にあてて「怪我をしたくなかったら大人しくしろ」と脅した。
国王レオポルドからはこの件に関しての全権を委任されていた。フリッツ・ヘルマンはしばし考えた。このまま国王の前に連れて行き大騒ぎになると、事情を知らない人間に余計な事を知られる可能性がある。彼は御者に言った。
「フルーヴルーウー伯爵のお屋敷に行ってくれ」

伯爵邸につき召使いに案内されて中に入ると、外出の用意をしたマックスが階段を下りてきた。
「これは、ヘルマン大尉。あなたがわざわざお迎えにいらしたのですか」
「いいえ、伯爵。本日、王宮に向かわれる前に、このままにできない厄介ごとを処理していただきたいのです」
「厄介ごと？」
フリッツは馬車から御者が引っ立ててきたアニーを縛っている縄を引っ張った。
「この娘がどうやら後宮に入り込んでよからぬことを企んでいたようで」
マックスは娼婦のような服を着て立っている娘を見てぎょっとした。
「アニーじゃないか！」
アニーはすっかり貴公子然として、ヘルマン大尉と親しく話しているマックスを見て、怒りの涙を浮かべながら猿ぐつわの向こうから何かを叫んだ。先生が伯爵ですって。ラウラ様と将来を約束したと言っていたのに、その仇によくも心を売ったわね！　言いたいのはそんな所だろうかと、フリッツもマックスも考えた。
「それは、大変ご迷惑をおかけした。この娘はもちろんこちらで引き取ろう」
そういうと召使いの方を向いた。
「すぐに伯爵夫人をここへ呼んでくれ」
召使いは、かしこまって奥へ入っていった。アニーは伯爵夫人という言葉を聞いてさらに怒り狂って暴れだした。ラウラ様が亡くなってまだ一ヶ月も経たないのに、もう別の誰かと結婚したなんて！
「アニー！」
暴れていた娘は動きを止めた。聴こえるはずのない人の声だった。

振り向くと、その時には水色のドレスを着た女性に抱きしめられていた。生きているはずのない女主人ラウラの突然の登場に呆然としていると、フリッツ・ヘルマン大尉はサーベルで彼女を縛っていた縄を断ち切った。それとほぼ同時にマックスが猿ぐつわを外してやった。
アニーは泣きながらつぶやいた。
「ラウラ様……ご無事だったのですね……」
「そういうわけだ。陛下に何をするつもりだったのか知らんが、今回だけは何もなかった事にしてやろう。少し行儀作法を仕込んでやってくれ」
そういってヘルマン大尉が去ると、マックスとラウラは揃って頭を下げた。
マックスは召使い頭に命じた。
「悪いが、僕たちが帰ってくるまでに、この娘にまともな召使いの服装を用意してやってくれ。今日からこの子には伯爵夫人の世話をしてもらう事にするから」
ラウラはそれをルーヴランの言葉に訳して囁いた。アニーがびっくりして顔を上げると、優しく頷いた。
「すぐに帰ってくるから、それまでこの人たちの言う事をきいて待っていてね」
マックスとラウラは表で待っていた馬車に乗って王宮に向かった。ルーヴランからフルーヴルーウー伯爵の発見の報に異議を唱え、相続権を主張してバギュ・グリ侯爵が乗り込んできているとの報せを受けたのだ。
王宮の応接室では、国王レオポルド二世が最高級のワインを共に飲みながらバギュ・グリ候の相手をしていた。非常に礼儀正しく話をしているが、その話題は挑発ぎりぎりといってよかった。
「時に、あれ以来噂を聞かぬのだが《氷の宰相》ザッカ殿はいかがなされておられるのか」
バギュ・グリ候は、ぎょっとした顔をし、そっと汗を拭きながら答えた。
「わが国王陛下と王太女殿下を欺き、偽の王女をこちらへ送り出した罪により、役を解かれ全財産を没収の上、投獄されました。新しき宰相が任命されるまでの間、国王陛下の親政が敷かれております」
「そうか。陛下にもご心労が多い事とご推察つかまつる」
ヘルマン大尉が入ってきて、フルーヴルーウー伯爵夫妻が登城したと耳打ちすると、「ここに連れてくるように」と指示をして、侯爵にしっかりと向き直った。
「侯爵殿。一つお訊きしたい」
「なんでしょうか、陛下」
「初代フルーヴルーウー伯爵位はグランドロンが授けたものであり、バギュ・グリ家の血を引くのは伯爵その人ではなく伯爵夫人ユリアであった。この事を正しいと認識されておられるか」
「然り」
「では、正統なフルーヴルーウー伯が、バギュ・グリ侯爵令嬢と再び婚姻を通して縁を深めることに異存はありますまい」

侯爵は眉を一つ上げて言った。
「正統な、と。二十四年も姿を消していて、突然正統なと言われましてもな。それにわが娘は二人ともわが領地におります。どこかの馬の骨と結婚してフルーヴルーウー伯爵夫人を騙ったりすることなどありえませぬ。それこそが其奴らが偽物の証拠。私がそれを証明してみましょう」
レオポルドは口元を歪めて笑った。
「ではどうぞ、ご随意に」
王が目配せをすると、ヘルマン大尉が隣の部屋に通じる扉を開け、二人が入ってきた。
「なっ！　先生、ラウラ！」
「父上様、お久しゅうございます」
「侯爵殿、その節は素晴らしいお飲物をありがとうございました」
ラウラとマックスは臆する事もなく、侯爵がした仕打ちに怒っている様子もなく、近づいてきた。その冷静な佇まいが却って侯爵を慌てさせ、彼はレオポルド二世の前で取り繕う事も出来なくなってしまった。
王は侯爵の前に進み出た。今までのような儀礼的な歩み寄り方ではなく、威嚇するように大股で。
「紹介の必要もありませんでしたな。親しく名前を呼ばれたのをしかと耳にしましたぞ」
「う……」
「王女の婚姻と同時にあなたの領地に帰ったはずのご令嬢が、わが領地にいるのは何故でしょうね。フルーヴルーウー伯に嫁がせたからでしょう？　それとも何か他の邪な理由でわが国に送り込まれたのですか？」
「それは、その……」
「いろいろと、根も葉もない噂をするものもおりましてな。例の偽王女がバギュ・グリ候と関係があるのではないかとか、それを知った娘婿フルーヴルーウー伯に毒を盛って殺そうとしたとか……。もしその噂が本当だとなるとわが国が宣戦布告をするのは、侯爵殿、あなただということになりますが」
「いや、偽王女の件は、私とは……」
侯爵は真っ赤になり、西の塔でマックスに対して示した態度を恥じながら、視線を避けた。レオポルドは畳み掛けた。
「では、フルーヴルーウー伯爵にあなたがご令嬢を嫁がせたと余が聞いている話は、確かに真実なのですな」
バギュ・グリ候は項垂れて肯定した。それより他に方法はなかった。ザッカと同じような目に遭うのは嫌だった。
レオポルド二世が頷くと、ヘルマン大尉が側にいた衛兵たちに指令を出した。衛兵たちは剣を構えると一斉に胸の位置に捧げ持ち右足を左足のもとにそろい踏みして叫んだ。
「フルーヴルーウー伯、万歳！」
「グランドロン王、万歳！」
祝砲が撃たれた。フルーヴルーウー伯爵領の人びとは歓びの声を上げて若き領主の帰還を祝った。王侯貴族も、町の商人たちも、それから農民たちも仕事をやめて祭りとなった。祝いの酒や食事の種類はそ

れぞれに違ったが、一つだけ共通しているものがあった。それは人びとが歌っているメロディ「森の詩」。いにしえより受け継がれた寿ぎがグランドロンの青く高い空に響き渡った。

O, Musa magnam, concinite cantum silvae.
Ut Sibylla propheta, a hic vita expandam.
Rubrum phoenix fert lucem solis omnes supra.
Album unicornis tradere silentio ad terram.
Cum virgines data somnia in silvam,
pacatumque reget patriis virtutibus orbem.

おお、偉大なるミューズよ、森の詩を歌おう。
シヴィラの預言のごとく、ここに生命は広がる。
赤き不死鳥が陽の光を隅々まで届け、
白き一角獣は沈黙を大地に広げる。
乙女たちが森にて夢を紡ぐ時
平和が王国を支配する

（初出　二〇一五年六月　書き下ろし）